

学位論文題名

民国時期上海のメディアに関する研究

——アイデンティティとのかかわりをめぐって——

学位論文内容の要旨

本論文は、民国時代(1912～1949)、特に1930年代の上海において、新聞、雑誌、ラジオ等の活字・音声メディアが、人々の思考様式をどのように変えていったかを論じたものである。分析のための資料としては、文学作品、統計資料、調査記録のほか、1920年代から30年代にかけて発行された膨大な量の新聞、雑誌記事が用いられる。一般市民の声をすくい取ることに重点を置いた読者論的な方法であり、これが本論文の大きな特徴である。

論文はまず序文において、論文の目的と方法とについて述べたのち、以下のよう展開する。

第1章「一つの雑誌・一つの時代——『<sup>リーバイス</sup>礼拝六』について——」では、民国の歴史に一時期を画した週刊誌『礼拝六』(1914年、上海で創刊)を取り上げ、その編集、販売の戦略を分析する。政論雑誌全盛の時代に、『礼拝六』はいかにして自らを差別化し、流行雑誌として不動の地位を築いたのかとして、娯楽に徹した同誌のイメージ戦略と、読者を誌面作りに巻き込む投稿重視の姿勢に注目、読者に投稿を促し、投稿者を「理想的な読者」と位置づけて批評を加えていく編集方法こそが、『礼拝六』を他の類似雑誌から区別する最大の要因であったと結論づける。

第2章「『生活週刊』と鄒韜奮<sup>そうとうふん</sup>——その批評性をめぐって——」では、最盛期に大新聞並みの売り上げを誇った雑誌『生活週刊』(1925年創刊)を取り上げる。同誌を特徴づけるのは、「読者のポスト」という投稿欄で、結婚や健康に関する読者の問題に、編集を担当した鄒韜奮は直接回答したとされる。一方、同誌は自身の記事ないし翻訳に批評を加え、新たな事物や思想の解説、紹介にも努めるが、こうした編集のスタイルについて、鄒韜奮が『生活週刊』で目指したのは、同時進行的な回答と批評による〈読者共同体〉の創出であったと主張する。

第3章「1930年代上海新聞メディアの一断面」では、マス・メディアの出現に

よって、作家・編集者・読者それぞれの領域でどのような状況が生まれていたのかを検証する。上海ではこの時期、夕刊の発刊が相継ぎ、朝夕の二度、新聞を読む習慣が生まれるが、『大晩報』<sup>だいばんぽう</sup>（1932年創刊）は読者を獲得する方法として、映画スターや歌手の人気投票など、新聞自らが重大事件を作り出しイベント化するという戦略をとる。こうした読者参加の企画がもつ意味について、さまざまな意見や好みを数値化し序列化することは、〈読者共同体〉が共有すべきものの提示にほかならず、感性の均質化の可能性をも孕むと指摘する。

第4章「一二八事変と上海人アイデンティティの形成」では、同郷人意識からの変容の契機として、一二八事変（1932）を取り上げる。この事変は上海市内を戦場としたため、市民に大きな衝撃をあたえるが、一面では、上海市民の一体感を強める役割をも果たす。事変はまた、戦場ルポ、小説、写真集、映画、演劇、ラジオドラマなどに姿を変え、生産、消費されるほか、各種の記念行事や記念番組、歴史編集の作業、あるいは都市としてのイメージを定着させる試みが展開する。これらの動きは「上海市民」としての一体感を形成、確認するものであると同時に、イメージへの欲望を生み出し、消費させるものでもあるとして、新たなアイデンティティ形成のシステムとしてのマス・メディアの役割を強調する。

第5章「1930年代上海の就職試験——都市中間層の再生産装置として——」では、上海の文化の担い手となった都市中間層がいかにして形成されたか、という観点から、官営機関と民間企業の就職試験について検討する。まず問題の難易度、受験者の学歴等の分析から、高等文官試験「科挙」との類似性を否定、さらに就職活動/試験における新聞等の役割に注目し、こうしたメディアの作用こそが、同郷的なつながりから解放された新たな階層の出現を促す一因となったとして、就職試験は都市中間層の再生産装置であり、同時に、都市の青年たちの欲望（上昇志向）の再生産装置としても機能していたと主張する。

第6章「文字はいざなう——国民政府期における識字教育の論理——」では、南京国民政府の元で行なわれた識字教育に焦点を当てる。下層の民衆の識字に対する意欲の欠如と、これに対抗する教師の側の論理の不足を指摘し、国民政府下の識字教育の問題は、国家の富強のためという高次元の目的を設定しながら、末端に位置する教師にはそれを明確なかたちで示すことができなかったことにある、と結論づける。

第7章「記者という職業——〈文字〉と〈声〉の抗争——」では、映画女優の自殺事件（1934）を材料に、新聞記者をめぐる状況について考察する。上海の夕刊紙『大美晩報』副刊「記者座談」（1934年掲載開始）の分析を通じて、新聞界に

は、ラジオや映画などのメディアを脅威として捉える感覚が存在していたことを明らかにし、自殺事件のより大きな背景として、〈音〉と〈文字〉をめぐる二種のメディアの抗争があったことを指摘する。

第8章「民国時期上海のラジオ放送における使用言語について——国語普及との関連から——」 近代テクノロジーに対して人々は何を感じたか、という観点から、ラジオ放送に用いられた言語と聴き手の反応を検討する。中国では清末以来、救国運動の一つとして標準語を求める運動が展開、1936年、ラジオ放送でも標準語の使用が定められるが、実際の放送では各地の方言が用いられる。こうした言語の乱立状態に対する聴取者の意見を分析し、標準語と方言に対する評価と愛憎の実態を明らかにする。

第9章「〈戦争〉というテキスト——『大上海的毀滅』と上海事変の記憶——」 では、戦争とその表象としてのメディア報道・小説という視点から、<sup>こうしんか</sup>黄震遐の長篇『大上海の壊滅』（1932）を取り上げる。メディア報道によってしか戦争を経験できない市民と兵士との戦争に対する認識の落差に注目し、そこに表象されているのは、個々の記憶を呑み込み、固有性を取り払ってしまう巨大な力としての「大上海」であり、小説が描くのは、戦争の実態やその迫真の描写ではなく、本来、語るすべをもたない無名の兵士とその記憶のありようであった、と結論する。

第10章「〈守るべきもの〉の誕生——<sup>ぼくじえい</sup>穆時英の小説における〈戦うこと〉の意味——」 では、新感覚派の作家、穆時英の作品3篇を取り上げ、小説における戦争の表象とその変遷について検討する。まず『交流』（1930）と『<sup>くが</sup>空閑少佐』（1932）については、それぞれ、戦争への参加を〈個人〉として決断せざるを得ない都市の青年の孤独感、およびナショナルなアイデンティティの喪失とそれがもたらす死、を指摘、次いで『われらの世代』（1936）における大学生の行動の分析から、主人公が守ろうとしたのは、「愛国／ナショナリズム」という概念によって築かれた国家ではなく、自らが現実に住する空間としての上海とその市民であったとして、そこに従来の同郷的帰属意識を超える「上海（人）アイデンティティ」の誕生を見ようとする。

結語では、改めて本論の趣旨を述べ、今後の課題について確認する。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 武 田 雅 哉

副 査 教 授 中 山 昭 彦

## 学 位 論 文 題 名

### 民国時期上海のメディアに関する研究

——アイデンティティとのかかわりをめぐって——

本論文は、新聞、雑誌、ラジオ等のマス・メディアが、人々の思考様式にどのような影響をあたえたか、という問題につき、1930年代の上海に焦点を絞り、アイデンティティの成立ないし変容を中心に論じたものである。この種の問題に関しては、ベネディクト・アンダーソンの理論（「想像の共同体」）が知られるが、高橋氏は、メディアによって作り出される共同体は、必ずしも単一のものに収斂するのではない、という観点から、さまざまな「想像の共同体」形成の可能性を探ることによって、〈国家〉や〈国民〉あるいは〈民族〉といったカテゴリーを相対化しようとする。

この相対化の中で、主要な分析の対象となるのが都市の住民、具体的には上海市民におけるアイデンティティ形成の過程である。当初、出身地を同じくする人々の組織「同郷会」を単位として活動していた居住者が、どのようにして「上海人」という共通の——しかも、他地域への圧倒的な優越感を孕む——意識を獲得するにいたるのか、そこにどのような出来事と報道とが関わるのか、この点の解明が本論文の最大の課題であるが、しかし高橋氏が目指すのは、〈市民〉というカテゴリー自体をも相対化する視点であり、したがって最終的に求められるのは、種々の異なるメディアによって、どのように異なる共同体、あるいはアイデンティティが形成されるかという問題である。

中国のジャーナリズムおよびメディアについては、従来、個々の作家や文学団体との関係で追究されるにとどまり、一般の読者や聴取者との関係で論じられることはほとんどなかったと言ってよい。高橋氏の研究は、読者論的な立場からこの未開拓の分野に挑戦した意欲的な試みであり、就職試験や言語の均質化といっ

た問題を各種のメディアと関連づけて論じた独創性は、高く評価しうる。

論述については、目標としたさまざまなアイデンティティの追求が、結果として「上海人意識」の形成に傾き過ぎた点、あるいは、個々の章の独立性が高く、相互の関連が見えにくい点など、いくつか問題を残すものの、全体の達成度に関しては疑問の余地がない。博士論文というにふさわしい成果を上げたものと言える。

以上の結果から、当委員会は全員一致で、申請者高橋俊氏に対し、博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。